

ピエール・プレヴォとシスモンディ

—経済思想における功利主義的要素—*¹

中宮 光隆

はじめに

I. シスモンディ恐慌論

II. ピエール・プレヴォの経済思想

III. 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ

おわりに

はじめに

本稿は、18世紀末から19世紀初めにかけて主としてジュネーヴで活躍したピエール・プレヴォ（Pierre Prévost, 1751-1839）の社会経済思想の一端と、同時

*¹ 本稿は、2011年11月5日に京都大学で開催された経済学史学会第75回全国大会において報告した際の報告原稿を加筆修正したものである。当日私の報告の司会者だった喜多見洋氏（大阪産業大学）、予定討論者として貴重なコメントをしてくださった安藤隆穂氏（名古屋大学）、およびさまざまな角度から有益な質問をしてくださった有江大介氏（横浜国立大学）、深貝保則氏（横浜国立大学）、神代光 氏（慶應義塾大学）に、深謝の意を表す。なお本稿は、参考文献に掲げた諸拙稿を集約して行ったため、本稿の内容はそれらと一部重複している。

代にジュネーヴで刊行された雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』誌(1796-1815)およびその後継誌である『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌(1816-1835)とその編集者たちの思想の一端を明らかにし、それらをその影響を少なからず受けたと思われるシスモンディ(Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842)の社会経済思想と対比することによって両者の思想上の近親性を確認し、そこから両者に共通に見られる功利主義的要素を析出することが目的である。ここで「功利主義的」と表現したのは、本稿の課題は功利主義それ自体を論じることが目的ではないからである(ここでいう功利主義とは、せいぜい「最大多数の最大幸福」との表現に端的に示される思想を指している)。

私は拙稿[2004, 2005, 2006, 2009等]で、シスモンディと彼の周囲の人々との交流を跡づけ、彼の社会経済思想の淵源を考察した。彼自身の生い立ちから育まれたと思われる点はおくとして、第1に彼が青年期にその仲間に加わった、スタール夫人とそのサロンに集った人々、第2にジュネーヴ出身でその地にとどまり、あるいはイギリスやフランスで活躍した知識人たち、第3にのちに彼の義兄弟となるマッキントッシュをはじめスコットランドやイングランドの同時代人たち、そして18世紀末以降ジュネーヴで刊行された雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』(およびその後継誌『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』)や『立法および法学年報』の編集者や寄稿者たち(ピクテ兄弟、モーリス、プレヴォ、デュモン、ロッシ)等、シスモンディの社会経済思想に影響を与えたものとして、これらの人々との交流が注目される。それらの諸関係のなかから、シスモンディの思想基盤の形成や特徴がより明瞭になるだろう。それだけではない。そうだとすればこのことは、さらにもうひとつの興味深い論点を導く。すなわち、シスモンディを取り巻く知性の連携は、たんに歴史的時系列的にだけでなく、スコットランドやイングランドとヨーロッパ大陸諸国間という空間的地理的広がりの中かで捉えられなければならないということである。

そのようなパースペクティブを念頭に置きつつも、本稿ではピエール・プレ

ヴォ（および彼がしばしば論文や翻訳を寄稿した『ビブリオテーク・ブリタニク』誌等）の思想基盤を瞥見したうえで、それらとシスモンディの思想的連関を考察したい。

I シスモンディ恐慌論

私はかつて、経済学史学会編『経済学史 課題と展望』（九州大学出版会、1992年）や拙著『シスモンディ経済学研究』（三嶺書房、1997年）で、シスモンディの経済学をたんに「過少消費説」（「過小消費説とは何かの議論はおくとして」）と特徴づけることは誤りであることを指摘した。彼の恐慌論の論理は、生産者（資本）間の競争（その結果としての価格競争と過剰生産）という生産・供給の側面と、限定された消費という需要の側面の両面から展開されているのである。（この消費はいわば個人的消費を指している。彼は、社会総体で見た場合に社会の富は固定資本・流動資本・所得＝消費ファンドの三種からなるが、それらは一様に消費に向かっていることがきわめて重要だと注意を促している。個人的消費が最終的には社会の消費水準を決定すると考えているのである。）その際、「限定された消費」すなわち消費拡大の限定性に関する論理内容を詳細に追っていくと、そこには注目すべき2つの論点が含まれていることについても論じた。そのひとつは、個人の消費はおのずから限定されていて、一定の消費量が満足されればそれ以上の消費は要求しないという点である。これには欲求の問題が関わっている。他のひとつは所得と消費の関係である。富者の場合は所得は多くても消費はそれに対応して増大しない、貧者はその所得額が少なくても消費は相対的に多い、したがって消費・需要量を増大させるためには富者の所得よりも貧者の所得を増大させることが必要であるという主張である。これは所得のより平等な分配の問題に関わってくる。すなわち、シスモンディ恐慌論における一方（需要面）の基軸的論理には、「限定された消費」と欲求の問

題が、また社会総体としての所得と消費との関係でより平等な分配という課題が提示されていたのである。

(なお、「欲求の問題」の延長上に、J. ステュアートや A. スミスの著作を最上の経済学書と評価してその普及に努めたヴァンデルモンドの「人為的欲求」論と、シスモンディ経済学における見逃せないもうひとつの論点がある。ヴァンデルモンドの分業論が生産力の上昇という側面からではなくて、市民間の平等の実現との絡みで主張されているからであり、シスモンディが論文「生産と消費の均衡について」のなかで「奢侈品は、これを次から次へと手に入れていくにつれて、その一つひとつから感じる喜びの度合いは減っていく」と主張している点が注目されるからである。しかしこれらの論点は本稿で取り扱う範囲を超えるので、割愛せざるを得ない。)

このようなシスモンディ恐慌論の、その根底にある彼の思想はいかなるものか、その思想の継承発展関係はどのようなものか、—これがシスモンディ研究の次の課題である。もちろん、A. スミス経済学の影響は明白である。それはシスモンディ自身が『経済学新原理』(*Nouveaux principes d'économie politique*、初版1819年、2版1827年)で述べているところである。これについては論点が2点ある。第1にスミス経済学がどの程度正確に理解されあるいは取り込まれているか、第2に『経済学新原理』におけるスミスとの距離ないし位置関係である。後者は「転向問題」として指摘される。後述のように、「転向」の背景には、シスモンディ自身の現状理解があったことは当然としても、本稿で取り上げるピエール・プレヴォ等からの思想的影響も大きかったのではないかと推測されるのである。

II ピエール・プレヴォの経済思想

シスモンディよりも22歳も年上のピエール・プレヴォは、1751年にジュネー

ヴで生まれた。幼いことから神学を学んだと伝えられるが、若くして哲学・論理学・法律学を修めた。また物理学・天文学にも強い関心を持ち、同僚からの刺激もあって後にそれらの分野の著作を残すなど、幅広い学問分野で造詣が深かった。そして彼は、オランダ・リヨン・パリ・ベルリンで教職や家庭教師、それに教授職を経た後、1796年にジュネーヴで統治機関のひとつである「200人委員会」のメンバーに選出された。

熱や重力といった物理学に関する多くの著作を残したピエール・プレヴォは、けっして自然科学の分野にのみ関心を抱いていたのではない。彼は道徳哲学や経済学に関しても少なからざる著作や翻訳を發表している。パッペは、「プレヴォはジュネーヴにおける最初の国民経済学の教師であった」（Pappe(1963)、p.71.）と述べている。道徳哲学や経済学に関する著作のいくつかは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載されたし、また単行本として出版もされた。単行本のひとつはデュガルト・ステュアート（Dugald Stewart, 1753-1828）の *Element of the Philosophy of Human Mind* の翻訳（1808年、ジュネーヴ）であり、もうひとつは T. R. マルサスの『人口論』の翻訳で1809年に刊行されたものである。さらに単行本にはなっていないが、プレヴォは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に論文「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」（QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION）を發表しているし、1806年に発行された同誌の31巻に収録されているマーセット婦人の『経済学問答』からの抜粋記事もプレヴォによる翻訳と思われる。

カンドルは、プレヴォは D. ステュアートに、1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後の活発な手紙のやりとりによって両者の間は本物の友情で結ばれていたと指摘している（Candoll, 1839, p.8.）。実際、両者の関係は親密であったことが、翻訳単行本にプレヴォが寄せた訳者序文からも分かる。その中でプレヴォは、この翻訳には D. ステュアートは何ら手を加えてい

ないこと、しかし「彼との文通や交友関係を持っている」ので問題はないという趣旨のことを述べている。その上でプレヴォは、D. ステュアートがプレヴォにこの翻訳の出版を勧めたこと、そして「一刻も早くそれを実行したかった」理由として「単に私が著者や著作を評価しているからだけでなく、それが私の講義の一部分で私に手引き書を提供したからである」(Pierre Prévost, 1808, pp.vii-viii.)と述べ、そこに付した注で1804年にジュネーヴのパシューから出版した自分の著書『哲学論集』を参照するよう指摘している。プレヴォはD. ステュアートの理論を自分に取り込み、それを自著や講義に利用するまでに評価していたことが分かる。

一方、1809年に出版されたマルサス『人口論』翻訳書に付したプレヴォの訳者序文は短いものである。ここでもプレヴォは、その翻訳を著者マルサスから勧められたと述べている。すでに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に発表された『人口論』の仏語抄訳を読んだマルサスが、「私 [プレヴォ] がその諸原理をよく理解していること」が分かり、「私が必要と判断する変更を加えることを相応に許可することまでした」という。しかしプレヴォは「この許諾を乱用するようなことはしない」で、マルサスが出版したままの内容を伝えるよう努めたとしつつも、補遺に関しては若干の軽微な修正を施し、また主要な主題から逸れたりイギリスに固有の問題と思われる箇所や章に関しては削除したと述べている。ここまではたんなる説明にすぎないと見て良さそうであるが、われわれにとって興味深い点は、この叙述に続くくだりであり、それはプレヴォが「最近の事情から、私は、イギリスの救貧法に関連する議論の大部分を翻訳せずにはいられなかった。まず第一の理由は、やや特殊とはいえ、テーマが非常に興味深いものであったからであり、次にこの議論が議会の救貧委員会 (comité de mendicité de l'Assemblée) に提案され、同委員会によって賢明にも否決された様に、軽率な模倣を警告するのに役立つことができるからである。」(P. Prévost, 1809, pp.viii-ix.)と述べている点である。この時期にすでに

プレヴォは、救貧法に関連するテーマに関心を寄せていたことが窺える。ただし、この短い序論の叙述の限りでは、彼が貧困や救貧法に対してどのように考えていたか、いかなる姿勢を取ろうとしていたかは明白ではない。委員会の「否決」を「賢明」だと表現する意味、あるいは「軽率な模倣」は何を指しているか、その「警告」は何に向けてのものか等も確認できない。そしてこの書の本文はマルサス『人口論』の翻訳であるから、これらの疑問を解く鍵は他の著述に求めるしかないであろう。

プレヴォは1806年に発行された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌31巻に「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」を寄せた。比較的長編のこの論文は、この時期のプレヴォの人口や貧困に関する見解を理解する上で不可欠である。

この論文の冒頭でプレヴォは、マルサスの考え方を要約している。

「マルサス氏の人口論の最終的な結論は、貧者の結婚は奨励されるべきではない、ということである。その理由は、人口は生活の糧に依存するということである。というのは、人口はそれ自身、生活の糧よりもはるかに急速に増加する。したがって、人口は必然的に何らかの障害によって阻止され、その水準にとどまる。しかし、飢饉や戦争や疫病といった破壊的な障害は、致命的な惨禍として避けられなければならない。その諸前例が多く分野で破壊的な力を発揮している悪習や窮乏が、さらに一層災いをもたらしている。したがって、貞節や社会的幸福と矛盾のない諸手段、すなわち子どもの境遇が確実ではないような結婚を思いとどまらせること、また近代国家においてそもそも人々が服するよう仕向けられる慎慮の動機を強めることによって、人口（増加）を予防する障害を効かせることが有効であろう。窮乏や悪習はそれらが最も普遍的な様相を帯びたものである。

このすべての理由は以下の2命題に帰される。

人口は食糧に依存する。

したがってその過剰を予防する必要がある。」(P. Prévost, 1806, pp.23-24.)

このようにマルサス人口論の骨子をまとめたのち、プレヴォは、この2命題のうち第1のそれはよく知られているが、第2のそれはあまり主張されていないどころか、「幾人かの著者はどのような種類の障害でも人口に対立させるのは政策上の誤りであると考えているようにすら思われ」とし、その一例としてルソー (Jean-Jacques Rousseau) を批判的に引き合いに出している。

ここでのプレヴォによるルソー批判は、「ルソーは人口を幸福の温度計にした」との一点に集約される。プレヴォは、ルソーが『社会契約論』のなかで「正確な尺度に欠ける道德の量を、その特徴に合わせて、どうやって算定するのだろうか？」との疑問を投げかけたうえで、ルソーの主張を明らかに批判的に引用している¹⁾。これに対してプレヴォは以下のように批判している。

「これら様々な表現には、疑いもなく多くの真理があるとともに、そこでの誤謬は混乱し絡み合っていて、見抜くのにやや骨が折れる。しかしながら結論に注目するならば、ルソーは明らかに政府の良さの尺度を与えるものは数であって幸福ではない(…)ということが解る。」(*ibid.*, p.27.)

ここに見られるように、プレヴォは、ルソーが社会や政府の状況の善し悪しの尺度を単に人口の多さに還元していることを批判しているのであるが、そこには二つの論点が表現されている。ひとつはもちろん人口だけが尺度ではないということであるが、それだけではなく、さらに「幸福」が尺度だとしている点である。人口が多ければよいということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。同様の主張は、続けてミラボー (Mirabeau, Victor Riquetti, Marquis de) の『人間の友』を引き合いに出してなされている。プレヴォは次のように主張する。

「ミラボーはおおよそのところ『社会契約論』の著者と同じ見解を表明している。彼は、最大の情熱を込めて、あえて不都合を問題にするようなことを望まずに、人口の利点を賞揚している。

『人間の友』(*Ami des hommes*)の序文のあと、彼は、人間を広い視野からみたいと願い、人間に過度に多くのことを詰め込む計画に反対する卑劣な快樂主義者(épicurien)しかいないと考えているように思われる。この著作の第2章はこのフレーズで始まる。『人口がひとたび社会の第1の富として認められると、それはどこから引き出すのかとか、その種の富を得る手段を知ることが問題になる。』—この著者がそのタイトルにもとづいておおいに賢明に答える問題は、生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知ることである。—しかしながら、それでもなお彼は富の第1に人口をおいている。もし社会的つながりが非常に多数の人間にとって窮乏の不変の原因にはならないことが期待されているとしても、戦い疲れてはならない誤謬。人口は疑いもなく非常に大きな富である。そして生活の糧と比較して遅くて漸進的なその増加は止められるべきでは決してない。しかし、(『人口論』の著者がとてもしばしばたきこんでいるように)各人が生活することができ、そしてなおまづ何らかの愉楽を楽しむことができるところで発展を止める必要がある。望ましい富として考慮されるべきものは、この愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福であって、不幸を運命づけられあるいは存在感を味わうことができる前に死に至る子どもの無制限な出産ではない。」(*ibid.*, pp.27-28.)

ここではブレヴォの主張は明瞭である。この点でのルソー批判と同様に、人口こそが富であるとかその際限のない増加のみを称えることは誤りであるとミラボーを批判している。人々は愉楽を楽しむことができなければならない。望ましい富は愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福である。これがブレヴォの主張の第1の論点である。それだけではない。「生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知らなければならない」。すなわち、人口は生活の糧の量に依存するのであって、その逆ではない。これがブレヴォの主張の第2の論点である。そしてこの点で、ブレヴォはマルサスと軌を一にするのである。

さて、「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」における

これ以降のプレヴォの叙述（脚注を含む）は、どうすれば生活の糧の生産が増加しうる範囲に人口の増加を抑制することができるかという課題に対する、ガルニエ（Germain Garnier）やセー（Jean-Baptiste Say）等の議論に関する検討に充てられている²⁾。しかしながらプレヴォは、いずれも簡単にしか触れていない。

それに対してJ. ステュアートに関してはやや詳細に論述されている。「おそらく他の著述家たちは、もはやそれに力点を置かなかつたし、ジェームズ・ステュアート以上に人口論に接近して来なかつただろう」（*ibid.*, p.32.）と彼は考えるからである。プレヴォがここで対象にしているのは、J. ステュアート『経済の原理』（*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767. 仏訳 *RECHERCHE DES PRINCIPES DE L'ÉCONOMIE POLITIQUE.*）第1編の第12章から第17章、すなわち人口増加（増殖・出産）およびそれと統治や階級それに農業生産との関係と、第21章の「第1編の要約」である。プレヴォがJ. ステュアートから引用している箇所は、まず、あらゆる階級の住民に結婚を勧めることに対する批判、子供を養育することができない両親から生まれた子とその親の悲惨な結末に対する警告である。プレヴォ自身の叙述からは、彼はJ. ステュアートのこの主張に理解を示しているように読める³⁾。

プレヴォは、J. ステュアートからの引用とそれにたいするコメントを付した後、論文「若干の考察」では爾後、彼自身の見解を述べている。そこでプレヴォは、人間生活における家族の重要性と芸術作品などに見られる「感性の刺激」という「好ましくない傾向」を指摘した後、人口抑制に関する誤った見解を批判している。

最後にプレヴォは以下の一節でこの論文を締めくくっている。

「われわれは最後に以下のように考える。すなわち、人口論の教義をもてあそばずに、その有用な適用がなされ、諸個人にそして政府にはなおさら慎重にそれを熟慮させ、そしてこの教義が、普及され、論議され、見識と

思いやりのある人々、悪徳や困窮の情景をひどく悲しむ、とりわけあらゆる種類の哲学が有害な傾向をもつとは考えない人々、あらゆる種類の改善を永久に断念する必要があるとは考えない人々、そのような人々の検討に付されることが強く期待されるということ、である。」(ibid., p.55.)

このようにプレヴォは、すくなくともこの時期にはマルサスの人口論を評価していた。マルサス以前の思想家や経済学者についても、マルサスにつながる叙述や論理を見いだそうとしている。また彼は、マルサスに「敵対」したり、人口は食糧生産高に依存すること、食糧生産には限界があることから人口抑制が不可避であることを認めつつも、その対応策として死にいたる病を持ち出したりすることに反対している。彼が求める人口抑制策は、「力強い、賢明な、徳の高い」解決方法であって、それで人口増加を「抑制するのに十分である」と彼は考えているのである。

なお2点付け加えておきたい。第1に、プレヴォの叙述には人々、とくに貧者や労働者の貧困からの回避ないし脱却を目指す視点が随所に見られることである。マルサス人口論を称賛する背後に、プレヴォのこの立脚点・思想が垣間見えるように思われる。第2に、プレヴォはデュガルト・ステュアートだけでなくジェームズ・ステュアートをよく読み、評価している点である。しかしながらこの点についての検討は本稿の対象範囲を逸脱するので別稿に委ね、ここではその指摘だけにとどめておきたい⁴⁾。

Ⅲ 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ

『ビブリオテーク・ブリタニク』(*Bibliothèque britannique*)誌は、マーク＝オーギュスト・ピクテ(Marc-Auguste Pictet, 1752-1825)がアルプス地方の地質調査からジュネーヴに戻った翌年の1796年に、弟のシャルル・ピクテ(ド・ロシュモン)(Charles Pictet de Rochmont, 1755-1824)と友人のフレデリック＝ギヨー

ム・モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice, 1750-1826) に呼びかけて刊行されたものである。その背景としてビッカートン (David Bickerton) は、18世紀になって書籍の出版と取得がいわば普遍化した点を挙げている。すなわち、16、17世紀揺籃期における書籍は、大聖堂に寄贈されたり特別なファンドによって購入され鍵のかかる書棚に秘蔵されていたのに対して、18世紀になると出版事情が変化して安価で小型で持ち運び可能な書籍の出版が、世俗的な知識を得るためばかりでなく娯楽目的の需要によって活気づけられた。そして、教育を受けた大衆がより広範に増大するにつれて、百科事典の出版が検討されるのも当然といった状況になった。新しい読者層は、知識と視点、とりわけそれらを獲得するための定期刊行物の出版を広めるキー・プレーヤーになったというのである。その際、定期刊行物は、より安価での印刷と出版社の増加によって「改良されたコミュニケーション」手段、すなわち図書というメディアの普及の副産物だったとされる。というのは、定期刊行物は出版物の宣伝や抜粋や翻訳といったいわば二次的な内容にとどまっていた、多くの出版者たちは、雑誌を作成するにあたって百科事典のような特性を要求し、特定の分野におけるすべての出版物を網羅することを求めたからである。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌が主として諸科学の先進国であったイギリスで出版された書籍の翻訳と抜粋を掲載したのは、このような状況の下で企画・刊行された定期刊行物としていわば当然の編集内容であったというべきであろう。もっとも、同誌がイギリスを重視したのは、諸科学の先進国という点だけではない。ジュネーヴとイギリスは、人々の往来も含めて文化の交流が盛んだったからである。

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は1796年から1815年まで刊行され、1816年以降は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』 (*Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts*) 誌に引き継がれた。18世紀中葉から19世紀前半にいたる期間、ジュネーヴは政治・経済・社会の分野で大きな変動を繰り返した。数度の内紛や外国からの侵略の脅威にさらされた後、1794年の武装蜂起では、600人以

上が投獄され有力者が処刑されたという。他方、1796年に始まるナポレオンのイタリア遠征は、ジュネーヴをも次第に危機に陥れていった。1798年4月、ジュネーヴはフランスに占領され、併合された。ピッカートンが指摘するように、「1796年ジュネーヴにおける『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の創刊はそれ自体、イギリスとジュネーヴの強力な絆の象徴であり、この雑誌がフランス統治の時期を通じて存在し続けたことは、ジュネーヴ自身とイギリスの共通の敵によって定められた運命に屈服することをジュネーヴが拒否したということを示している」たのであるが、もはやその役目を果たす必要はなくなったのであり、「フランス帝国の崩壊とともに、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌に転換した。これにはまた、象徴的な意味がある。復興期におけるジュネーヴ人のコスモポリタンな性格に、イギリス心酔者が外国の影響に対してよりバランスのとれた全面対応、この都市が今日まで保持し続けた対応方法を執るという変化が生じたのだろう」（Bickerton, 1999, p.15 & pp.23-24.）。誌名の変更は、当時の社会・政治状況の変化だけでなく、おそらくそのなかから獲得された編集者たちのこの国と同胞の目指すべき姿を示しているとみるべきであろう。

前述のように編集者は、ピクテ兄弟とモーリスである。さらに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌には多くの協力者たち（collaborators）がいた⁵⁾。

ここでとくに注目したいのは、ピエール・プレヴォである。ルイ・オディエやシャルル＝ガスパール・ド・ラ・リーヴとともに正規に報酬が支払われる協力者になっている。しかもプレヴォは、同誌の *Littérature* シリーズで、となっている。まだ若年のころから宗教、哲学、法学を学んだプレヴォは、青年期に物理学等の自然科学を学び、またその分野で多くの著述を残しているが、18世紀末頃からは社会科学、とくに経済学関係の著作も多くなっている。前述のように、プレヴォは「ジュネーヴにおける経済学の最初の教師だった」のであるが、それはジュネーヴ・アカデミーの教壇とともに、『ビブリオテーク・ブリタ

ニク』誌を舞台になされたと言うべきであろう。もっともその後もプレヴォは、自然科学分野の著作を発表し続けたし、後継の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌にも自然・社会科学の両分野で書き続けた。また協力者のなかで、Etienne Dumont も *Littérature* で6編にかかわっているとされる点も注目される。

さて次に、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特徴をふたつの面から検討したい。ひとつはこの定期刊行物はその読者や当時の社会にどのような影響を及ぼしたかであり、他のひとつはこの定期刊行物はいかなる思想的基盤のもとに編集されたかである。とはいえ、抜粋や翻訳が主体の本誌について、その思想を明確にすることには困難が伴う。そこでこの点に関して本稿では、編集者が執筆したと思われる序文や、後述のように翻訳者や抜粋者によって挿入された注を手がかりに考察する。

確かに同誌は翻訳やその抜粋記事が多い。しかし次節で瞥見するように、翻訳や抜粋に付した翻訳者（筆者）の注に注目されるべきものがあるし、もとよりオリジナルの著作の選択そのものに、編集者、協力者、寄稿者たちの意図があるはずである。それだけではなく、ビッカートンも指摘するように、同誌は次第に「派生的な役割」を脱却して「はっきりと内容のある特徴」を発展させたのであった。その傾向は後継誌の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌でさらに強化されているように思われる。

本誌を特徴づけるもうひとつの側面は、編集や協力者たちの思想的基盤である。それは一言で言えば、「効用」と「道徳」である。「効用」は「効用原理」あるいは「功利主義」に置き換えても良いだろう。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌第1巻第1号（1796年）序文以下の叙述がある。

「効用原理 (Le principe d'UTILITÉ)、これはわれわれの不変の羅針盤であるが、この原理はそもそも、すべての科学を同一線上に置くことを許さない。農業はわれわれの目から見ると第1線を占めている。また農業はわれわれにとって、第1の技術である。さらにそれは、とりわけ諸原理を広め

ることを思考する科学である。それは、イギリスやスコットランドのモラリストたちの諸著作において、貴重な教訓を秘めているものである。個人はこれらの哲学者以上に、正義の本能を発展させ開発し、人間の心の内に秘められたあらゆる気力が目指す、幸福の熱い全面的な期待を導いている。この著者たちの道徳は明解で純粹である。その特色は穏やかであり魅力的であり、おそらくけって虚偽の哲学の過ちなど無く、彼らの人間性にとりつかれた悪は、もはや逆の毒を必要としないだろう。」(*Bibliothèque britannique*, t.1, *Litterature*, (1796), pp.6-7.)

このように創刊号冒頭の序文で編集者たちは、効用原理を「不変の羅針盤」として彼らの思想基盤を明確にしたうえで、イングランドやスコットランドの「モラリスト」と結びつけつつ、道徳あるいは正義について語っているのである。しかしここで取り上げた創刊号「序文」の叙述ではきわめて抽象的なものにとどまっており、その内容は明確ではない。それがここよりもやや明瞭になるのは、第7巻（1798年）の序文である。ここではあらためて同誌の分類——*Littérature* と *Sciences et Arts* ——の内容を説明している。そのなかの *Littérature* について以下の叙述がある。

「科学や技術も農業も含まない内容全体を取って一言で示すならば、われわれは LITTÉRATURE より以上に適当な言葉を見出さなかった。われわれはわれわれが手中にしていた（掲載）内容の取捨選択を規定してきた動機に関して、またわれわれがこのシリーズにおいて、ほかでもないいくつかのテーマを重視した範囲に関して、われわれの読者に説明する義務がある。

1 国の政治体制がどうであれ、すべての人々の歴史はわれわれに、宗教、法、習慣がその安寧と繁栄のもっとも確実な保証であることを証明している。われわれはそれらをまた、諸個人の幸福の主要な源泉として考えている。したがって、われわれがもっとも頻繁に読者諸君に立ち返ってくれるよう求めなければならないのが、社会のこの大きな関心事なのである。」(*Bibliothèque*

britannique, t.7, *Litterature*, (1798), p.iv.)

この一文をもってしても、必ずしもその思想は明確ではない。しかしここでは、第1に安寧と繁栄のために宗教・法・習慣がもっとも重要な要素であるとしている点、第2に「諸個人の幸福」という課題を持ち出している点、第3に「諸個人の幸福」と（社会の）「安寧と繁栄」を結びつけている点に注目しておきたい。

さらにこの序文は次のように主張している。

「精神の変化が全体として改革の方向に向けられる時代においては、市民法は、最も永く使用してきたものでさえ、改めて検討されなければならない。多くの著述家がそれに従事し、またそのまっ最中である。ベンサム氏は、諸思想の賢明さ、深さそれに独創性の点で第一人者であると思われる。ロンドンに居を定めたわれわれの同胞のひとりで、この著者[ベンサム(一引用者)]とずっと以前から親しい関係にあった人物——この著者は自分の手稿類をこの人物に委ねたのであるが——は、その抜粋をわれわれに送りたがっていたが、彼は再度われわれにそれを約束した。このコレクションのメリットは、職業上であろうと趣味の上であろうと、これらの重要な内容を熟考するわれわれの読者に、見落とされることはないだろう。」(*ibid.*, p.vi.)

ここでもベンサムの何が重要なのか、その内容は明確ではないが、すくなくともベンサムを高く評価し、その著作の抜粋を取り上げる意思のあることが示されている。これに続くパラグラフは、以下のとおりである。

「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”は、われわれには二つの観点の下に考察されうるように思われる。現在の世代への適用として、また教育によって次の世代に強い影響を及ぼすことに照らして。

われわれが Gisborne、Ferguson、Dugald Stewart、Adam Smith、Aikin の著作からとった抜粋は、生活というやっかいな道の、いかに優れた案内であるかを示しているに違いなかった。

しかし、単純な教訓（戒律）は弱々しく効くにすぎないし、まれに成人たちに作用する。精神を鍛えることによって、いかなる情熱もかきたてないのなら、それは心を素通りするだろう。有効な効果を上げるために、モラリストは、一方では人は教訓（l'exemple）から強力な影響力が生じることになろうこの傾向と、他方ではあらゆる社会的徳を創造し活性化させる、そして名誉などもっていない、この同感を授けられる、そのような道德本能において作用させることを求めているに違いない。なぜなら、好意、思いやり、慈善を語っても、それは不完全にしか示されていないからである。これら二つの手段によって、現代の世代でさえ、多くのエゴイズムと無気力が打ち破られ、生き生きとして生産的な道德を回復させてみるができるからである。

（…）われわれは偉大な例を示す喜びに、有益な同感をかきたてる喜びに身を委ね、そしてこの喜びは裏切られなかったのであった。賛意と関心という貴重な証拠がわれわれの旅のこの部分を励ましたのであった。」（*ibid.*, pp.vi-vii.）

まず第1に、この引用の冒頭の一句、「道德、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”」にふたつの面で注目したい。ひとつは「自分自身と他人を幸福にする」ことが重要な事柄と捉えているように思われる点である。自分自身だけではないし、他人だけでもない。これは「多数の人々の幸福」と読めないだろうか。他のひとつは、これを「道德」に置き換えている点である。言い換えれば、18世紀の道德哲学と（多数の人々の）「幸福」を結びつけているのである。第2にこの一節で、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の（おそらくこの序文を執筆した）編集者たちが、18世紀イギリス（スコットランド）の道德哲学を高く評価していると認められる点である。ここで強調されている「教訓（とその影響力）」と「（同感をもたらす）道德本能」の重要性は、これら道德哲学者とその著作から得られると考えられているように思われる。

道德哲学と効用原理の結合、その視点からの啓蒙、これが『ビブリオテーク・

ブリタニク』誌の特性であり、その背後にはフランスに対抗するジュネーヴの知識人たちによる祖国への熱い思いがあったように思われる。

前述の『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性、すなわち編集者たちの立場は、同誌やその編集者たちへの有力な（と思われる）協力者のひとりであったピエール・プレヴォにも共通すると見るべきであろう。フランスからの独立後のジュネーヴで、上述のように『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、1816年から『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』へと誌名が変更された。それにもかからず、編集者たちと協力者であるピエール・プレヴォの基本的視点・見解は、変わっていないと思われる。「基本的」というのは、根底に道徳と効用原理を据えている点に変化は無いものの、社会・経済状況の変化によって論理の力点の置き方に進展が見られるからである。状況の変化の少なくともひとつはジュネーヴの独立であるが、他のひとつは経済状況の変化、ナポレオン戦争終結後のいわゆる「過渡的恐慌」の経験であり、後者が前者以上に大きなインパクトを与えている。

前述のように、19世紀初頭のピエール・プレヴォは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（31巻、1806）に寄せたマルサス『人口論』に関する考察では、マルサスに対する批判的言辞は見られない。むしろそこではマルサスを下敷きにしつつ、それに反した見解をとる（と少なくともプレヴォが理解する）ルソーが批判されている。そのうえでプレヴォは、生産量の増加を超える人口増加を如何に抑制するかを検討しているのである。これにたいして1816年の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌におけるプレヴォは、生産量の増加に懐疑的である。このことを端的に（やや遠回しにはあるが）表しているのが、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌第2巻（1816）に掲載された、彼によるマーセット婦人『経済学問答』抜粋とそのなかに付された彼（プレヴォ）の注釈である。この抜粋記事の執筆者名は記されていない。しかし注釈の末尾にピエール・プレヴォのイニシャルが付されているところから、抜粋記事の執筆者がピエー

ル・プレヴォであることはほぼ確実である。

その注釈を見る前に、それが付された本文自体の論述展開の流れを確認しておこう。この抜粋記事の冒頭で、プレヴォであろう筆者はまず、経済学とはいかなる学問であるかに触れている。この点に関する『経済学問答』の記述にも触れ、またJ. スチュアートの著作のタイトルに「経済学」(*économie politique*)という用語が用いられていることに触れつつ、筆者プレヴォは、J.-B. セーの「経済学は富を研究する科学である」とともに、「経済学は、富が如何に生まれ、広められ、消滅するか、その発展を奨励する理由、あるいは頹廢を引き込む理由、人口への影響、高い身分の能力、人々の幸福と不幸を示す」科学であると指摘し、また『経済学問答』のなかでは「マダム B」が「若い学生」との対話のなかで、この定義に追従して、「この科学はまさに、富や国家の繁栄を追求することを学ぶこと」であると述べている。

そのうえで筆者プレヴォは、『経済学問答』に登場する「マダム B」はこれに続いて「富の源泉」を追求し、「所有愛が労働の情熱を鼓舞し、生産物を無限に増大させる」こと、そしてこの「所有は法律によって保障されねばならず、そうすることで安全性が維持される」とともに、「労働が永続的な活力を獲得するための不可欠の条件である」ことを学生に理解させていると指摘と述べている。次に分業の原因と結果について詳しく論じられ、「機械の発明によって促進された蓄積は、それ自身労働と、生産に必要な手段である資本を生み出す」ことを説明している、と筆者プレヴォは指摘する。続いて筆者プレヴォは、「マダム B」と学生「キャロライン」の対話を引用している。その内容は概略以下のとおりである。「マダム B」が社会の発展とともに繁栄、安全、分業の幸福な諸結果を認め、そしてまた富者と貧者の差別が生まれた、と述べたのに対して、学生「キャロライン」は不平等を引き起こすあらゆる悪は悲しいものだと応える。それに対して「マダム B」は、「私はなぜ差別が悪だといわれるのか解らない」と反論する。すなわち、貧富の差を悪だとする学生に対して、「マダム B」は悪

ではないといって、これを肯定するのである。そして富者がいなければ貧者は餓死するし、貧者がいなければ富者は働くことを強制されるから、「富者と貧者はおたがいに必要」だと言う。さらに機械の発明・導入に話がおよび、学生が機械は労働者の雇用機会が失われ、人々から仕事を奪うと否定的に捉えていることに対して、「マダム B」は、機械の導入が労働を節約し、商品価格の低下をもたらし、その結果需要が増加し、またそれに応じて生産も増加する、そこでこの分野では機械の導入以前よりもかえって雇用される労働者は増加すると指摘する。さらに資本があるかぎり貧者は雇用を見つける。豊かな国では大企業が生まれ、さらに道路や運河の工事、橋や建物の建築等々、「農業や製造業や商業における資本の通常の充当の他に、多くの人々に仕事を与えるすべての分野で労働（需要）が生み出される」ことが付け加えられ。ここにいたって学生「キャロライン」は、「マダム B」の主張に同意する。

しかし興味深いのは、この対話とその結末に対して筆者プレヴォが注で疑問を投げかけている点である。

「ここでは諸結果を評価するために、他の科学では何回も成功した方法、極端に仮定をたてるという方法をここで適用されることはできないだろうか？ もしどの分野においても労働は最後には単純化されるとすれば、どうなるのだろうか？ すべてが非常に短時間で、かつ非常に容易に生産され、需要は全体的に増加し、われわれが注釈を加えているテキストの論理に従うならば、生産物は需要に比例するだろう。そして仕事の単純化がなければ、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果、労働者の食糧、衣服、住居が改善されることになるのだろうか？ 一多分。一何ら疑いもなく、富者はあらゆるもので満ち溢れているだろう。この豊かさの中で、貧者の部分が現在よりも遙かに多数存在していたということは、あまり確実ではない。それはちょうど、印刷所の印刷工や綿織物工場の労働者が、手作業の筆耕者や手織り工よりも遙かに良く処遇されているということが証明され

ていないのと同様である。様々な形態で表現されるこの観察は、富の理論が形成されるとしても、幸福の理論は作れないということを十分に示している。

（P. P. p）」（P. Prévost, 1816, p.352.）

プレヴォは、たとえ労働者の雇用が増加しても、彼らの生活が向上してはいないことから『経済学問答』の対話を批判しているのである。その視点は、重要なことは人々の幸福が実現されているかどうかであって、単に富が増加すれば良いというものではない、ということである。

Ⅳ おわりに

以上、シスモンディ恐慌論を念頭に置きつつ、ピエール・プレヴォのいくつかの著述と『ビブリオテーク・ブリタニク』誌、その後継誌である『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』の編集者たちの思想を瞥見した。プレヴォや『ビブリオテーク・ブリタニク』誌編集者たちは、その基本ないし基軸において功利主義的思想をもっていた。より具体的には、人々の幸福—“多数者の幸福”—の実現の重要性と貧富の差への疑問ないし否定である。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌が発行された時期にはフランスによる事実上の占領下であって、イングランドやとりわけスコットランドの思想に共感を抱き、それらを積極的に取り込んだ同誌とその編集者たちは、そこに立脚点を置いた定期刊行物を発刊することによって、祖国の人々への啓蒙とその国の発展を期待したように思われる。同誌の協力者や寄稿者たちも、そのような立場に共鳴したに違いない。ピエール・プレヴォやエティエンヌ・デュモンが執筆した記事が少なからず掲載されていることが、その証左であろう。

さらにそのような思想的基盤に立つピエール・プレヴォは、1810年代中葉までとそれ以降の時期において、継続する視点（両時期に共通の視点）と、異質の視点があるように思われる。すなわち、1810年代半ばまでの時期においては、

マルサス『人口論』に沿って人口と食料の関係を議論していたのに対して、1810年代中葉以降は、より“多数者の幸福”を主張するようになっていく。この時代の経済の混乱を目の当たりにして、当然のことながらスミスやそれをそのまま取り込むマーセット婦人などの当時の思想家たちの論調に疑問を投げかけている。そこにはピエール・プレヴォ自身の、19世紀初頭の見解とは違ったニュアンスの主張が見られるのであるが、それは彼の視点や立脚点が変更されたのではなく、1810年代中葉以降の経済社会の変化への対応だったとみるべきである。それは多数の人々の幸福の実現を重視した彼の思想が一貫していたからこそ生じた、当然の結果であった。

ところでシスモンディが「スミスの祖述」を変更する「スミスの部分的修正」の必要を感じ、『経済学新原理』のモチーフを形成しつつあったのは、ちょうどこの時期であった。このような状況から、シスモンディの背後にピエール・プレヴォや『ビブリオテーク・ブリタニク』誌があったのではないかと推測することが可能であろう。“多数者の幸福”は、シスモンディの経済思想における基盤的思想としての「平等な分配」に結実したと思われる。

なお、本稿では取り上げることができなかったが、1820年から22年までの3年間、『立法および法学年報』(*Annales de législation et de jurisprudence*) がジュネーブで刊行されている。これに執筆しているのは、ロッシ (Pellegrino Luigi Odoardo Rossi)、デュモン (Etienne Dumont)、シスモンディ、それにベロ (Pierre-François Bellot) 等である。この顔ぶれからこの雑誌も功利主義思想を前提にしているように思われるが、これに関する考察は別の機会にゆずりたい。

注)

- 1) ピエール・プレヴォが引用するルソーの主張は以下の通りである。「私 [ルソー] としては、単純な徴証が低く評価されるとか不適切な間違った信念を持たれることに、いつも驚かされている。政治的協調の目的は何だろうか？ それは構成員の維持と繁栄である。構成員が維持され繁栄するもっとも確実な徴証は何だろうか？ それは彼らの人数、人口である。したがって、そう議論される特徴を他に求めようとしてはならない。他はすべて同じであっても、その政府のもとでは、外国人の財力がなく、帰化がなく、植民地がなくとも、市民にあふれ、さらに増加するような、そのような政府が間違いなく最良である。その政府のもとでは国民が減少し滅亡するような、そのような政府は最悪である」(Pierre Prévost, QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806, p.26.)。
- 2) ガルニエについては、彼の『経済学原理要論』(*Abrégé Élémentaire des principes de l'économie politique*, 1796) が採りあげられ、「人口と文化との関係、人口と生活の糧とのあいだに生じる依存関係をまったく正確に規定した」とプレヴォは評価している。またセーについてプレヴォは、『経済学概論』(*Traité d'économie politique*, 1803) における議論を紹介して、「セー氏もまた、人口がつねに生産量に比例することを証明し、多数の権威者によってこの意見を確認している。彼は人口原理にふれる以下の注釈をそれに付け加えている。『生産を促進することでしか人口を増加させることはできない』。」と述べている。(*ibid.*, p.32.)
- 3) プレヴォは以下のように述べている。

「彼は単なる出産と現実の増殖 (multiplication) と区別している。[… (J. ステュアートからの引用を省略) …]

結論としてJ. ステュアートは、統治者に、単なる出産のための結婚を禁じることによってこれらの悪を予防することを強く勧めている。そのために彼は知識人たち (lumières) に取り巻かれ、社会を構成する様々な階級の人口と通常の徴兵手段の状態を正確な調査によって手に入れることを望んでいるのである。彼は彼の力が及ぶ一般的な結果に満足していないが、彼の考えを理解させるためにそれらを使っている。彼は人口の非常に急速な増加を心配しているのに、他の政治家たちはそれらの諸結果を心配することなど考えてもいないように思われる。」(*ibid.* pp.34-35.)

これに続いてJ. ステュアートの第13章からは、長い引用がなされている。しかし注目すべきことは、プレヴォがその途中で第12章の最後の一文 — 「私は自由の愛好者として、結婚への新たな制限を勧めるようなことはしない。そもそも制限は、われわれの世紀を支配する精神にまったく反している。」 — を引用していることである。

さらに、プレヴォは、J. ステュアートの第14章から、多数の人々の命を奪う病気も人口減少をもたらすことにはならないという一節と、第17章の穀物生産と人口の関係に関する箇所を、J. ステュアートによるこの章の結論とも言える最後の部分—「したがって私の意見では、人口は食糧に比例しなければならないし、それは均衡がほぼ達成されるまではけっして止まらないのである。」—まで含めて引用している。

J. ステュアートからの引用の最後にプレヴォは、第1編の要約である第21章の叙述から、そのなかの第12章と第15章に関する記述の一節をとりあげている。まず第12章の要約でJ. ステュアートの「人間は増殖をやめることはできないが、それはちょうど木が生育をやめられないのと同じである。しかし生きることができるのは、栄養が与えるばあいではない。他方で、生活の糧の増加は結局止まらざるを得ないから、そうなるやいなや、人口増加は止まる。すなわち死亡する人々の割合が年々増大する」との叙述にたいするプレヴォの主張、「この著者 [J. ステュアート] が人口を扱う編の要約には注目すべき一節、マルサス氏が人口論と呼ぶもののがもっとも明瞭に述べられている箇所のひとつがある。」(*ibid.*, p.42.) は興味深い。

また第15章の要約部分でプレヴォは、J. ステュアートが「次に私はこれらの一般の原理をブリテンの諸島における人口の状態に関する個別の状況説明に適用する。そこで私は以下のように結論づける。そこで人口の障害になっているのは、戦争や貿易によって被った損失に依ってでもなく、食糧の輸出でもなくて、現在この国を人口増加の道徳的不可能状態においているこの国の政治状況によってである」と主張している箇所を引用したあと、彼は、「マルサス氏は、J. ステュアートが自分の後に執筆する人に要望していたように思われることを成したのだと言うことができる。」(*ibid.*, p.44.) と述べている。

J. ステュアートからの引用とそれにたいするプレヴォのコメントはここまでである。

- 4) スミス経済学をフランスに広めた人物のひとりとされるヴァンデルモンドの経済学(講義)には、たぶんJ. ステュアートの影響が見られる。19世紀に入った直後の時期である。仮説として私は、フランスおよびスイス・ロマン地方におけるスミス経済学の受容には、ヴァンデルモンドを通じたJ. ステュアートの影響があるのではないかと考えているが、現時点では推測にすぎない。
- 5) これら協力者については、拙稿(2011b)参照。

(参考文献)

- Bibliothèque britannique*, t.1, *Litterature*, 1796.
- Bibliothèque britannique*, t.7, *Litterature*, 1798.
- Bibliothèque britannique*, t.31, *Litterature*, 1806.
- Bibliothèque universelle*, t.2, *Litterature*, 1816.
- Bickerton, David, *Mark-Auguste and Charles PICTET, the Bibliothèque britannique (1796-1815) and the Dissemination of British Literature and Science on the Continent*, 1986.
- Bickerton, David and Proud, Judith (ed.), *Transmission of Culture in Western Europe, 1750-1850*, 1999.
- Candolle, A.-P. de, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève*. (Tiré de la *Bibliothèque universelle* de Genève.), Avril 1839.
- Cherbuliez, A, *DISCOURS SUR LA VIE ET LES TRAVAUX DE feu Pierre Prevost, ANCIEN PROFESSEUR DE PHILOSOPHIE À L'ACADÉMIE DE GENÈVE. Prononcé à Genève, à la Cérémonie des Promotions, le 12 Août 1839*.
- Marcet, Jane, *CONVERSATIONS ON POLITICAL ECONOMY; IN WHICH THE ELEMENTS OF THAT SCIENCE ARE FAMILIARLY EXPLAINED*, 1817. (PHILADELPHIA edition)
- Pappe, Hellmut Otto, Sismondis *Weggenossen*, 1963.
- Perroux, Olivier, *TRADITION, VOCATION ET PROGRÈS, LES ÉLITES BOURGEOISES DE- GENÈVE (1814-1914)*, Slatkine, 2006
- Prévost, Pierre, *Conversations on Political Economy, etc. Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres, et arts*, tome 2^{me}, *Litterature*, 1816
- , *QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION*. In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806.
- , *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN. Par Dugald STEWART, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST.*, 1808.
- , *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Exposé des effets passés de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Par T. R. Malthus, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST*, 1809.
- Salis, Jean-R. de, *SISMONDI 1773-1842, LA VIE ET L'ŒUVRE D'UN COSMOPOLITE PHILOSOPHE*, 1932. (SLATKINE REPRINTS, 1973).
- Simonde de Sismondi, Jean-Charles-Léonard, *Nouveaux principes d'économie politique*. 2 vols,

1er éd. 1819, 2e éd. 1827.

- 喜多見洋 「転換期ジュネーヴの知識人たち —スイスの視点から見た西欧社会経済思想史の一齣—」『大阪産業大学経済論集』第6巻第3号、2005年。
- , 「マルサス人口論のフランス語世界への波及」永井義雄・柳田芳伸編『マルサス人口論の国際的展開 —19世紀近代国家への波及—』, 2010年12月。
- 中宮光隆 『シスモンディ経済学研究』1997年。
- , 「シスモンディとリカードウの一接点」熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション—』上巻、2004年。
- , 「J. C. L. シモンド・ド・シスモンディ —恐慌・困窮克服の経済学—」大田一廣編『経済思想6 社会主義と経済学』2005年。
- , 「シスモンディ経済思想とその由来 —マッキントッシュ、コンスタン、ピクテ＝ド＝ロシュモンを中心に—」飯田・出雲・柳田編著『マルサスと同時代人たち』2006年。
- , 「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号。2009年。
- , 「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号。2010年。
- , 「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号。2011年。
- , 「『ビプリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ —道徳哲学と効用原理—」『アドミニストレーション』第18巻1・2合併号。2011年。